

はじめに

近ごろの大学生は本を読まない、文章が書けない——などと言われはじめてから結構な年数が経っています。その原因については色々と論議されてきていますが、つまるところ、以下のようなことが主因のように思います：

- ・文章表現以外に、興味を抱かせる文化対象がたくさん存在する。
- ・ゲームやスポーツなどの比重が高くなり、じっくりと本を読む時間が取れず、そのための場や空間も確保できない。
- ・高等学校までの国語教育が文章の持つ「情報伝達性」をあまり重視していないためか、論理的な文章を書くという訓練が疎かになっている。

ちなみに、以前、国語学者の水谷静夫先生（東京女子大学名誉教授）は、ある御講演で「理科離れ・数学離れと言う以前に、〈文科離れ〉が深刻だ」と語っておられました。まさに、上記の内容を端的に表現されたものだと思います。

もとより、言語は文化形成の根幹です。高い言語能力が格調ある文化、ひいては豊かな文明をも生み出します。これまでの国語教育を見直していただき、とくに「情報伝達性」という観点に、もっと重心をかけていただきたいものです。

さて、情報を伝達する技法には、大きく三つ：ライティング（writing、文章執筆・文書作成）、プレゼンテーション（presentation、発表・講演）、ディスカッション（discussion、議論／論議・討議・討論）があります。その中から、本書では〈ライティング〉に焦点を当てて、その技法の数々を詳説することにします。

まず、本書の読者の皆さんには、IT化された現代社会にあってもほとんどの活動が〈文章〉を核とした〈文書〉によって表現され、確認され、記録され、評価され、保存され、利用される——という事実を受け止めて、強く深

く自覚してください。したがって、いやおうなく、ライティング技法を磨かなければならぬのです。でも、心配は全くありません。ここで展開するライティング技法はすべて、誰でも会得できます。

本書では、ライティングの対象を、主に、科学技術系分野における日本語の〈文章〉とします。そして、そこに記される文章のためのライティング技法を様々な観点から分析し、理解してゆくことにしましょう。ですので、その書き方・洗練の仕方を当面の目標として掲げ、実務に対応できるように解説します。さらには、関連知識として、科学技術系文章の作成上で必要となる〈著作権〉の知識、その他の知的財産権に関しても解説します。そして、最終的な目的は、個々人が直面する〈文書〉をより良いものとして作成し、提出できるようになるまでの必須基礎知識の獲得です。

さらにまた、他の情報伝達技法としての〈プレゼンテーション〉および〈ディスカッション〉については、〈ライティング〉と共に通する部分も多いので、それらの主要なポイントも併せて学習します。

本書の内容は、著者が担当している慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスSFCでの授業「ライティング技法ワークショップ——科学技術系のライティング」での内容を纏めたものです。また、関連したテーマで著者がこれまでに担当した幾つかの大学での特別講義や、今までに参加・参画した数理系編集者勉強会・講習会用に作成した資料なども取り込んでいます。

これまで、授業を通じて多大な触発・啓発をいただいた慶大SFCの学生諸君、ならびに、共立出版・近代科学社をはじめとした多くの先輩・同僚編集者、そして編集者集団「さる会」の仲間たち、とくに本書の原稿内容にコメントを寄せてくださった岩田誠司氏、内村直之氏、亀井哲治郎氏、高山哲司氏、細木周治氏、森田豊氏、横山伸氏、吉田宇一氏に感謝します。

また、慶大SFCの非常勤講師担当をお世話してくださった仰木裕嗣先生、授業でTA(Teaching Assistant)を務めてくれた小柳玲乃氏、渡辺俊氏に深謝いたします。そして、授業での参考資料をご提供くださった京都大学の岩間一雄先生、ならびに早稲田大学の竹内郁雄先生に御礼申し上げます。

さらに、本書を最終的に纏めるにあたり、原稿の段階で精読してくださっ

て多くの有益なご示唆を頂戴した、慶大SFCの石崎俊先生、京都大学の磯祐介先生ならびに木上淳先生、元朝日新聞社の岡田久男氏、CSKの黒川利明氏、明治大学の杉原厚吉先生、NICTの中川晋一先生に深甚の謝意を捧げます。

また、出版にあたって終始お世話になった、慶應義塾大学出版会の上村和馬氏に深謝します。

そして、原稿を読んだ上で読者の立場からディスカッションをしてくれた長女の恵、次女の翠、妻の明子にも、日々の支援も含めて感謝します。

本書が、読者諸氏のライティング技法の向上・洗練、編集実務などに多少なりとも役立つことを念じて止みません。

2011年3月

小山 透

目 次

はじめに	i
------	---

第1章 ライティングの目標と目的

1.1 文書の文化論	1
1.2 キャリアとライティング	2
1.3 日本の「国語」教育と「日本語」教育	4
1.4 日本語の特徴	5
1.5 文章の様態分類	7
1.6 科学技術系の文章	8
1.7 科学技術系文章の5要件	8
1.8 ライティングの上達	10
Column 吉田洋一先生「何を書かないか、ですね。」	12

第2章 ライティングの準備

2.1 心の準備	15
2.2 ライティング環境の整備	17
・文房具と基礎資料　　・メモ書き　　・ノート	
作り　　・場所と時間の確保	
2.3 題材の準備	21
・構想　　・情報整理	
2.4 執筆のプロセス	22
2.5 ライティングの作法	24
・文書での作法　　・文章での作法　　・コピペ	
問題	
2.6 書く上での留意点	27

第3章 文書と文章

3.1 文書の種類	31
3.2 対象読者	33
3.3 横書きと縦書き、横組みと縦組み	35
3.4 文書での内容分量の基準	35
3.5 本文の構成と展開、文書の構成	36
3.6 本文の階層構造	39
3.7 5W1H/2H と 3C1V	40
3.8 タイトル	41
3.9 論法：演繹と帰納	43
<i>Column</i> 森口繁一先生「これで、いいですかね？」	46

第4章 文章の抑えどころ

4.1 デザイン	49	
・全角と半角	・ベタ組みと分かち組み	
・書体の選定	・文字サイズの選定	・行間
とピッチの選定	・字詰め・段落・段組み	
・マージン		
<i>Column</i> デザインの時代	54	
4.2 語、文、文章、文書	57	
4.3 文体	60	
4.4 句読点	62	
・「読点」の役割と特徴	・「読点」を打つべき所	
4.5 道標用語	65	
4.6 助詞に関して	67	
4.7 接続詞の使い分け	68	
4.8 副詞の使いこなし	70	
4.9 文末表現	71	

第5章 言葉の深み

5.1 送り仮名	75
5.2 漢字表記とひらがな表記	77
5.3 同音異義語	80
5.4 同訓異義語	81
5.5 同義異字語	83
5.6 類義語	84
5.7 対義語	88
5.8 敬語	90
<i>Column</i> 廣瀬健先生「のんびり考えて、人と話すことね。」	94

第6章 数字、数式、記号、単位の使いこなし

6.1 数字の表記	97	
6.2 数式の表記と表示	99	
・イタリック体とローマン体	・書体	・特
殊記号用書体	・添え字	・補助記号
・隙間	・数式の折り返し	・文中での数式
表記	・条件式の表示	・省略表示
・代用しがちな数学記号		
6.3 間違いややすい記号と文字	105	
<i>Column</i> TeX の世界	106	
6.4 各種の記号	108	
6.5 物理単位・物理定数	117	
6.6 化学式の表記	119	
・元素 / 原子記号	・分子式	・構造式
・示性式	・化学反応式	・イオン
<i>Column</i> 小松勇作先生「どこかに、まだあるよ。」	121	

第7章 専門用語の表記

7.1 学術専門用語	123
7.2 省略語と正規語、アクリニム	125
7.3 カタカナ用語	128
7.4 国名・地方名・地名・企業名・人名	129
<i>Column</i> 石田晴久先生「これ、面白いですよ。」	132

第8章 表現の工夫

8.1 表現のバリエーション	135
8.2 能動態と受動態	137
8.3 強調処理	137
8.4 箇条書き	139
8.5 あいまい表現	140
8.6 不用意な言葉／表現、不適切な言葉／表現、差別 語／差別的表現	141
8.7 図・表・写真	142
<i>Column</i> 山口昌哉先生「おもしろいもんが、ね。」	148

第9章 ライティングにおける法律

9.1 著作権	151
・著作権法の構成　　・著作権法の趣旨　　・著 作権法の保護対象	
9.2 引用	154
・引用の5要件	
9.3 転載	156
9.4 引用対象の加工	157
9.5 特殊な著作物の著作権	159
・翻訳物　　・編集著作物　　・共同著作物	
9.6 著作権の発生時期	160

9.7 著作権の存続期間	161
9.8 出所の明示と参考文献の表示	161
9.9 タイトルの著作権	163
9.10 PL法	164
9.11 他の主要な知的財産権	165
・特許権　　・実用新案権　　・意匠権　　・商 標権　　・肖像権・パブリシティ権	
<i>Column</i> 彌永昌吉先生「ちょっと、考えてみましょうね。」	167

第 10 章 文章と文書の仕上げ

10.1 書き進める手順と中断、擱筆	169
10.2 校正	171
・校正記号と校正指示語	
10.3 禁則処理	173
10.4 分量の調整	174
10.5 レビュー	175
・レビューのフェーズ　　・レビュー者　　・レ ビューのチェックポイント	
<i>Column</i> 田島一郎先生「ほら～、良くなつたろう。」	179

第 11 章 話しの技法

11.1 「話し」と「ライティング」の関連性	182
11.2 プрезентーションの基本	183
11.3 議論と会合	186
11.4 会合の種類	187
11.5 議論での留意点	189
<i>Column</i> 波多野謙余夫先生「もう、いい頃ですかね？」	192

あとがき	195
参考文献	197
索引	199

第1章

ライティングの目標と目的

本書での「ライティング」は、執筆準備–文章執筆–文書作成という一連の活動を包括的に表す言葉として用いる。端的に言って、ライティングの目標（活動のねらい）は良い文章が書けるようになることである。そして、その目的（実現しようと目指すもの）は、中核を成す本文の〈文章〉をより良く書き上げて完成度を高めた上で、〈文書〉をすべての要件を漏らすことなく適正に作り上げることである。

本章では、われわれにとっての文書の意味を確認し、次に日本語をめぐる教育状況と日本語の特徴を整理する。その上で、文章の様態を考察することにより、われわれの目指す科学技術系文章のためのライティング技法への足掛けを固めることにしよう。

1.1 文書の文化論

すでに「はじめに」で述べたとおり、文書は知的な活動内容を表現・確認・記録・評価・保存するという、とても重要な〈書類〉である。つまり、それをもって自分の活動の内容・結果が「表現」され、他者によって「確認」「記録」される。さらにそれは、第三者によって「評価」されるわけである。しかも、それらはその後に「保存」され、何らかの形で他人に利用されたり参考に供されたりする可能性を持つ。つまり、新たな創作・創造に向けての知の基盤となって、その後の知的創作活動の状況に影響を与えることにもなるのである。

したがって、

〈文書〉は、作成者の人生を決定づけるカギである。

〈文書〉は、他者の知的活動の源泉である。

と言っても過言ではない。さらに、その内容はもちろんのこと、

〈文書〉は、「形式 (form)」と「様式 (style)」が大切である。

この点を、よく肝に銘じていただきたい。つまり、当該文書として不可欠な要項、一般的には題名・日付・氏名・捺印（または手書き署名）・所属などが欠かせない。それにより、権利の確保、義務の確認、責任の所在などが明確となるからである。

またさらに、「様式」を「デザイン」に置き換えるべきである：文書は体裁上の表現として、美的効果に十分留意して仕上げるべし、ということである（いうまでもないが、むやみに装飾に凝るということではなく、品格をもった“見栄え”にも配慮せよ、ということである）。もちろん、文章の一義性と、読みやすさにも注意しなければならない。そのためには、常に、“文書は他人に読んでもらうものだ”という意識を強く持ち続け、対象読者が文章の真意をスムーズに汲み取れるように、内容と共に、いろいろと形式・デザインにも配慮することが大切なことがある。

1.2 キャリアとライティング

ここでの〈キャリア (career)〉とは個人の「経歴」を指すが、さらに詳しく言うならば、次のようになる：

「さまざまな教育体験と、それらに基づいた更なる社会経験や職歴（研究・教育・実業など）を通じて獲得し、かつ積み上げてゆく“個人の能力”と“仕事の成果”の総体」

また、一生を通じての経歴という視点に立てば、

「生涯を通じての職歴全体」

を意味すると言えよう。

本書の読者には、今後、大学や企業の研究・教育機関で研鑽を積む方々、また実業界に飛び出して地球規模で活動される方々が多くおられることであ

ろう。当然、それらを通じて人間社会に貢献する多大な成果を生み出されることが期待されるが、その「成果」は、ほかならぬ〈文書〉によって公表され、活用されてゆくのである。

いうまでもなく、現代は高度な情報化社会である。したがって、キャリアを高めるためには、さまざまな情報に柔軟に対応することができる「個人の能力」を育成することが必要である。そのような観点において、個人の能力を備えるための必要な条件は以下のようになるだろう：

1. さまざまな情報・知識・知恵の理解と獲得
2. 1. の柔軟な更新性・対応性・応用性の獲得
3. 1.～2. の論理的な表現方法の獲得
4. 1.～3. を基とした、的確な判断と迅速な実践能力の獲得

1.1 節で述べたとおり、知的な活動内容である「仕事の成果」は〈文書〉として纏められ、表現・確認・記録・評価・保存・利用される。つまり、キャリアを表現し、実体としてイメージさせるものが〈文書〉であり、その中核が〈文章〉である。したがって、「個人の能力」によって「仕事の成果」を上げて文書の形に仕上げるためには、〈ライティング〉の技法を磨くことが不可欠なのである。

なお、以上に述べた事柄を実現するためには、次に示す8要素を備えることが必要である：

〈キャリア〉構築のための8要素

1. 一般社会常識：正直・積極性・責任感・思いやり・観察能力・時間管理能力（規定・約束などの厳守）・金銭／コスト管理能力・マネジメント能力
2. 教養：文化知識（国内外の歴史・音楽・美術・ファッション・スポーツなど）・多様な価値観の受容・適応能力（ボーダレス・グローバル化社会での対応）・ヒューマニズム（人種差別・偏見の排除）・客観視能力
3. 専門知識：ある分野のエキスパートとして備えるべき事柄と、その応用力
4. コミュニケーション・スキル：読解力・ライティング能力・プレゼン能力・議論展開能力・英語力（読解力・ライティング能力・会話能力）・情報処理能

- 力（データ管理・コンピュータ類の活用）・指導／統率能力
- 5.自己管理：自己批判能力（長所・短所）・他者からの批判対応能力・オープン感覚・目標設定と継続能力
 - 6.人脈：幅広い分野・年代・性別の知合い、外国の知人、周辺の仲間、家族
 - 7.経験の集積：成功と失敗、両方の豊富な実体験
 - 8.心身の健康：すべての基盤——「体・技・心」「知を支える体力」

ちなみに、これらの要素を備えた者が「実力者」と呼ばれ、多大な〈キャリア〉を有する人物として社会的に評価されることになる。そして、より条件の良い仕事、より高い地位、より高額な報酬を得ることができる。また、それにより、社会への貢献をさらに増大させる機会が増え、より充実した人生を送ることができるのである。

1.3 日本の「国語」教育と「日本語」教育

日本語の表現力はまことに豊かなものがあり、他国の全てのそれに、勝るとも劣らない。ただ残念なことに、わが国での、小学校から高校までに行われている「国語」教育は、伝統として、感性・情緒の授受が主体である。つまり、日本語を通じた情報の伝達性や精確性よりも、情緒性の表現力と感受性を高めることに重きが置かれている。日本がほぼ单一民族国家であるために、文化においては「間接性」が重要であり、人々の、相互の「融和」が優先されることに由来するのであろう。これは、米国が多民族国家の競争・契約社会であり、「直接性」「主張性」が優先されるところとまったく対照的である。

このことは、両国の言語の特徴に端的に現れている：日本語は、文法が非常に柔軟であり、一面、あいまいな部分が多い。「修辞学（rhetoric）」（『広辞苑』）[11]では、「読者に感動を与えるように最も有効に表現する方法を研究する学問」としている）という分野が在ることからも、“心を動かす”というのが、わが国の国語教育の主目的となってきたことは明らかである。一方、英語は文法の構造性が高く、必然的に論理性も高い。米国では

Language art（国語の技法）として、どのように正しい情報を分かりやすく伝え、明確な主張を行うか——という教育目標により、幼児期から徹底した教育がなされているそうである。

こういったことから、戦後に行われた「漢字制限」とも相俟って、我が国の国語教育では“情報を精確に分かりやすく伝える”という観点には、あまり重きが置かれていない。ただし、文部科学省の高等学校学習指導要領には「国語表現」が規定されており、ライティングの指導が行われることになっている。しかし、大学入試における小論文対策を目標とする教育指導の色彩が強く、それほど重視されてはいないのが現状であろう。したがって、この点が問題視されて久しいにもかかわらず、依然として有効な対策がほとんど取られていないと言わざるをえない。グローバル化がますます進む状況にあって、今後は、論理的な思考力とその表現力を養うことも明確に意識して、従来の「国語」教育から、情報の精確な伝達性をより重視した「日本語」教育への転換、もしくは分離独立させた科目設定を、切に望みたい。

ずいぶん前のことではあるが、木下是雄先生（学習院大学名誉教授）が学習院初等科での試みとして、国語と算数の授業を合体させて行い、情報伝達としての日本語教育と、論理的・数学的な考え方の育成に、共に効果を上げておられる事例をお聴きしたことがあった。私立学校ならではのチャレンジングな試みである。公的教育機関にあっても、このような観点からの日本語教育が必要な時代であるように思う。

しかるに、読者の皆さん方が今直面しているライティングでは、既に情報伝達が主目的であるはずなので、まずは現実的に、日本語の〈文章〉に対する考え方を、情緒性から情報性へと、ここで明確に転換していただきたい。

1.4 日本語の特徴

外国語、一般には英語を習い始めた時に、日本語との差異がたくさんあることに驚かれた方々は少なくないと思う。文字どおり、カルチャーショックであったことであろう。そもそも、われわれの日本語は言語理論としては、かなり特殊なようである。以下に、日本語の主な特徴を列記してみよう：

- 主語は省略可,
- 述語が文末（主語との物理的分離）,
- 肯定か否定かが文末になって判明,
- 語順が自由,
- 修飾語は被修飾語の前,
- あいまい表現 / 間接表現の存在,
- 語種の多様性（和語・漢語・外来語）,
- 送り仮名は不定,
- 和語表現と漢語表現の並存,
- 同音異義語・同訓異義語・同義異字語が多数,
- 類義語・対義語のバリエーションが豊富,
- 敬語の存在,
- 多くの外来語（翻訳語とカタカナ語、アクリニム（頭字語））の混在,
- 字種の多さ（漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字／ラテン文字・特殊な外国文字・数字・記号）,
- 多様な数字表記（漢数字・算用数字・時計数字）の存在,
- 句読点の表記が複数存在（カンマ／ゴマ点、ピリオド／白丸：4種類の組合せ）,
- 横書きと縦書きの並存,
- 基本は、1文字当たり全角分をベタ組み.

もとより、その国の固有の言語は文化の最たるものであり、時代と共に変容することも宿命である。したがって、われわれの日本語は今後も、さらに語彙が増えつづけ、表記の変化・多様性が起こり、表現の仕方も変化していくことであろう。

したがって、以上に掲げた日本語の特徴を踏まえながら、むしろそれらを大いに活かすことで、分かりやすく読みやすい〈文章〉を執筆するよう心がけることにしよう。さらに、科学技術系分野にあっては、当該の〈文書〉として適合する内容、構成、および書式を備えることが必要であることを心しよう。

1.5 文章の様態分類

文章は、われわれが日ごろ感じたり考えたりしていることを文字に置き換えて文を作り、それらを連ねて、まとまった内容を表現するものである。文章を、その意図としての観点で、次のように分類しよう：

- ・文芸系（発散性——主觀が中心：感性、感動），
- ・社会系（多義性——主觀と客觀の混在），
- ・科学技術系（一義性——客觀が中心；主觀との明瞭な分け（事実と意見の區別），
ト雷斯性、再現性、検証性）

ここで、「文芸系の文章」とは、読み手（対象読者）の心を楽しませたり感動させるように、心を揺さぶる、あるいは癒すような表現を志向するものを指す。またさらに、読み手側では、人によって、また同一人物であっても、感動箇所は異なることが多く、読むたびにも、その箇所に対する感動度合は変化することが少なくないものである。

また「社会系の文章」では、頭と心の両方を行ったり来たりさせるように企てて書かれることが多い。いきおい、読み手側では、人により、また立場により、その文章の理解の仕方（解釈）が異なることが多いのである。

一方、われわれが目指す「科学技術系の文章」は、他人に読んでもらい、一義に理解させ、記憶させることを志向する。つまり、説明力・説得力・伝達力・記憶力などを併せ持つ文章であるべきである。そこでは一般に、読み手の人と時を選ぶことはできない。しかし、そのような強い制約があるぶん、逆に、ライティングに当たっては比較的対処しやすいと言うことができる。つまり、“ツボ（壺）”（勘所）を心得てポイントを押さえればよいのである。したがって、そこには文才ではなく、「技法」が必要となると言えよう。その技法を身に付ければ、直面するライティングに必ず対処できるようになる。

なお、書かれた「文章」には、本人の人格・性格・知識などが如実に出るものである。同一対象、同一テーマについて書かれたものでも、執筆者によって、まったく異なる記述（表現）となる。同じものはありえない。だから、そこに創造性が認められるのである。また、翻訳でも同じことが言えて、同

一原文でも、訳者によって訳文は大幅に異なることが普通である。臆することなく、果敢にライティングに当たろう。

1.6 科学技術系の文章

すでに前節で述べたとおり、「科学技術系の文章」は、他人に内容を一義に理解してもらうという明確な意図を持った文章である。また、それを読むことで、幅広い教養を育み、対象分野の専門知識を獲得させ、深い考察・洞察を呼び込むものであるべきである。一言でいえば、「見識のある文章」である。

なお、その成分を分析すると、情報を伝える（文字類・数字類・記号類から成る）「文」の集合（文章）が中心となり、さらに文章の内容を補う図・表・写真・テクニカルイラストなどの「補材」（8.7節）、さらには論述展開上で説得性・客觀性を高める「数式」が組み合わさることで成り立つ：

- ・文の要素：漢字・ひらがな・カタカナ・外国文字（ローマ・ギリシャ・ドイツ・ロシア・ヘブライなど）・数字（漢数字・アラビア数字（算用数字）・ローマ数字（時計数字））・記号／符号類、句読点
- ・補材：図・表・写真・テクニカルイラスト
- ・数式

ここで注意したいのは、あくまでも補材と数式は文章の内容に関係のある必要最少限のものに限るということである。したがって、本論とは関係のない脱線した文章はもちろんのこと、原則としては埋め草の挿絵なども入れるものではない。

1.7 科学技術系文章の 5 要件

以下に示す五つの要件は、本書のテーマ「科学技術系のライティング技法」の中核をなすものである。つまり、執筆する文章で伝えたい内容の「説明力」「説得力」「伝達力」を、より高めることを達成するものであり、今後、折々に出現するので、これらを常に強く意識していただきたい。なお、これ

らはマクロ（巨視的）な観点と、ミクロ（微視的）な観点との両方で整備する必要がある。また、これらは独立したものではなく、互いに関連している点が多々ある点にもご注意ねがいたい：

① **ストーリー性**（展開の仕方、文章の流れ）

- ・論理性
- ・統一性
- ・単一性

② **品格**（言葉と表現+形式・デザイン）

- ・言葉の選定（省略語、差別語、記号に注意）、表記の適正選択（統一）
- ・表現の選択（文体は「～である調」が基本、差別的表現を避ける、「ら」抜き言葉に注意、タメ語（友達口調）は論外）
- ・統一性
- ・デザイン性

③ **精確性**（正確+精密）

- ・内容の正しさ・深さ
- ・統一された表記
- ・的確な表現
- ・一義性：（平易で簡潔な短文）
- ・事実に忠実
- ・資料に裏づけられた証拠性

④ **分かりやすさ**（対象読者のレベルでの理解性）

- ・論理性：3点セット「主張」－「論拠」－「補材」（証拠となるデータ、資料、用例／実例／反例、数式・図・表・写真），
- ・一義性
- ・統一性

⑤ **読みやすさ**（読み解き）

- ・簡潔性（短文、要領（基本的に、繰返し・冗長な表現・長い文など、無駄の排除）
- ・列挙、箇条書き

- ・読み点（息継ぎ）
- ・的確な表記
- ・適切な表現（差別的表現・差別用語にも注意）

重要なことは、われわれは、ここに示した5要件が満たされる文章を書き上げることであり、それは〈達意〉（考え・意図を十分に述べ尽くすこと）であればよく、「名文」である必要はない。そして，“行間を読む”といったことを期待してはならない。語呂合せにもなるが、われわれは分かりやすく伝わりやすい「明文」を目指すのである。

1.8 ライティングの上達

よく知られた訓戒に「ローマは1日にしてならず。」というのである。何事も、極めるための簡易な「王道」はない。相応の期間の地道な日々の努力の積み重ねが、やがて実を結ぶのだということに、誰しも異論はないであろう。

しかし、科学技術系のライティングにおいては、それなりのポイントを心得て当たることにすれば、比較的短期間で、より効果的に飛躍的なスキルアップ（技能向上、上達）が可能である。そのポイントとなる方策は、以下のとおりである：

- 準備する——まずは、“書き上げるのだ”という決心をすることである。そして、その上で、書ける態勢を作ることである。つまり、盛り込むべき情報・材料を綿密に集め、さらに書くための環境作りを周到に行おう。
- 読み込む——色々なものを読むことを習慣づけよう。毎日の新聞・週刊誌・パンフレット・チラシ類・エッセイ・小説・教科書・専門書・……、何でもよい。ただし、漫然と読むのではなく、内容と共に、“文章としての完成度”にも注意を払いながら、いわば吟味しつつ読み込むことである。そして、その上で、内容の「要約」を書くといっ